



清教学園、文部科学省の委託事業「学校図書館の活性化に向けた調査研究」を実施
司書教諭の関わりにより、高校生一人あたりの年間貸出冊数(ノンフィクション)が5倍増加
学習者主体のテーマ設定が、探究学習における学習意欲向上の前提であることを明らかに

「一人ひとりの賜物を生かす」ことを掲げ教育活動を展開する清教学園中・高等学校(大阪府河内長野市、校長 森野 章二 以下「本校」)では、この度、文部科学省からの委託事業を実施し、「探究学習と図書館活用のギャップを埋める授業実践の検討」について研究を行いました。

【本委託事業の実施背景】

児童生徒、とりわけ高校生の不読率の改善が求められています。第66回学校読書調査概要^{※1}によると、全国の高校生のうち、1ヶ月間に本を1冊も読まなかった生徒の割合は、49.8%と高い数値です。また、学習指導要領の改訂により、2022年度から新科目「総合的な探究の時間」が設置。生徒に対して一方的に知識を伝達する授業とは別に、生徒自らが興味関心のあるテーマを見だし、図書館等を活用しながら自発的に学習を進めていくための授業が求められています。

文部科学省はこうした背景から、「学校図書館の活性化に向けた調査研究委託事業」を実施しています。不読率の改善、自主・自発的な学習活動といった課題を、学校図書館の取組みにより改善向上していくことが研究事業の目的です。本校は2021年度の事業を文科省より受託。調査研究を実施しました。

清教学園は「学校図書館賞」(2014)を受賞した図書館「LIBRALIA」を有しており、図書館を活用した授業を推進してきました。とくに中学での実践「卒業論文『なんでやねん』」の取組みが実り、中学生一人当たりの年間貸出冊数は42.7冊を達成しています。

一方で、本を読まない傾向にある全国の高校生と同様に、本校高校生においても図書館機能の活用は芳しくない状況です。清教高生が取り組む探究学習「Global Studies」の学習データを参照すると、2020年度の成果物作成に用いられた参考図書冊数は、平均0.17冊でした。生徒は専門家によって著された図書を参考文献として用いず、体よくまとめられたWeb記事(まとめサイト等)で代用している実態がわかりました。「研究」の名を冠することも多い探究学習で、学問的な誠実性が問われるこのような状態は、同様の授業に携わる全国の先生方の悩みでもあります。

これらの背景から、文科省の調査研究に参加。「探究学習と図書館活用のギャップを埋める授業実践の検討」をテーマに研究を行いました。授業で活用できる図書館の体制がすでに整っており、実績もありませんが、なぜ高校の探究学習で図書館が活用されないのか。その理由を明らかにし、授業改善を模索しました。さらに、実施した授業実践と図書館の活用が、どのように探究学習に貢献したのかを検証しました。



【「探究学習と図書館活用のギャップを埋める授業実践の検討」に関する実践報告の主なトピックス】

1. 仮説設計のための事前調査を実施
 - 授業を履修した既卒生、担当した教員に聞き取り調査を実施
 - 過去の学習成果物データ、利用統計から、図書館の活用状況調査を実施
2. 仮説の設計
 - 仮説 1) 生徒主体のテーマ設定であるほど、探究学習に対する学習意欲が向上し、生徒は図書館を活用するのではないか
 - 仮説 2) (仮説 1)に基づき授業を設計し、さらに図書館スタッフから図書探索の支援を受ければ、図書館の利用統計データにも変化が現れるのではないか
3. 施策立案と実行
 - 施策 1)カリキュラム改定
 - 施策 2)授業改善
4. 検証結果
 - 結果 1:生徒主体のテーマ設定で研究を行った生徒の方が、「研究に興味を持って取り組むことができたか」「研究テーマに関する知識の理解」などのアンケート設問で、よりポジティブな結果となり、学習意欲の向上が示された
 - 結果 2:生徒主体のテーマ設定で研究を行った生徒の方が、図書館を活用して学んでいた。とりわけ、図書館スタッフ(司書教諭)が授業を担当したクラスでは、70%以上の生徒が3冊以上の図書資料を参考にし、さらに20%近くが「自分の研究に必用不可欠な図書資料があった」と回答した。また、学年全体の一人当たり年間貸出冊数(ノンフィクションのみ)が、過去データとから約5倍に向上した。

【実践報告の詳細】

<1. 仮説設計のための事前調査を実施>

はじめに、どのような理由で高校生・高校教員が図書館を活用できないのかを明らかにするべく、事前の聞き取り調査を行いました。探究学習を履修した既卒生への取材では、「なぜ図書館を使った/使わなかったのか」「授業設計が自分達の図書館活用にどのように影響したか」などを調査しました。また、前年に授業を担当した教員への取材では、「授業をどのように設計しているか」「どのような点で図書館が使い辛いのか」などの質問を行いました。さらに、過去の生徒の成果物や、図書館の利用統計データを用いて、参考文献がどのように、どれだけ使われていたのかを調査しました。

これら事前調査の結果から「教員主体のテーマ設定では、生徒はわざわざ本を読んで学ぶ意欲が湧かない。簡単にまとめられているWeb資料に流れる」「本当に興味があるテーマであれば、本を読んで学ぶ。著者に手紙を送り直接取材もしている」といった生徒の意見が得られました。さらに担当教員の意見として「図書館を使うことは授業時間の制約から難しい」「読書を推奨するが、たくさんの文献を読み込む学習スタイルが合うのは一部の生徒。多くの生徒にとってはハードルが高い」などが得られました。

<2. 仮説の設計>

事前調査の結果をもとに、以下に示す二つの仮説を立てました。

[仮説 1]生徒主体のテーマ設定であるほど、探究学習に対する学習意欲が向上し、生徒は図書館を活用するのではないか

[仮説 2](仮説 1)に基づき授業を設計し、さらに図書館スタッフから図書探索の支援を受ければ、図書館の利用統計データにも変化が現れるのではないか

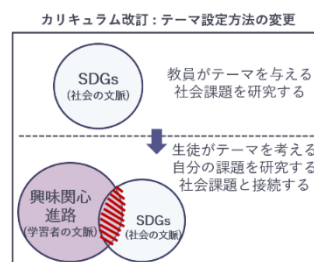


さらに、この仮説を検証すべく、以下に示すカリキュラム改定と授業改善施策を、高校2年生に対して実施しました。

<3. 施策立案と実行>

施策1:カリキュラム改定

- ① テーマ設定に関する授業設計を改訂。授業担当者が生徒にテーマを与える授業から、生徒が自らの進路、興味関心に基づきテーマ設定
- ② 資料収集に関する指導の充実。図書館や Web 資料をどのように使うかを、継続的に授業で指導



施策2:授業改善施策

- ① 図書館に併設された特別教室での授業実施
- ② 学年全体の一部クラスで、司書教諭が授業を担当
- ③ 生徒の情報を図書館で共有。図書館スタッフが生徒のテーマ等を把握し、それに応じて図書を提供

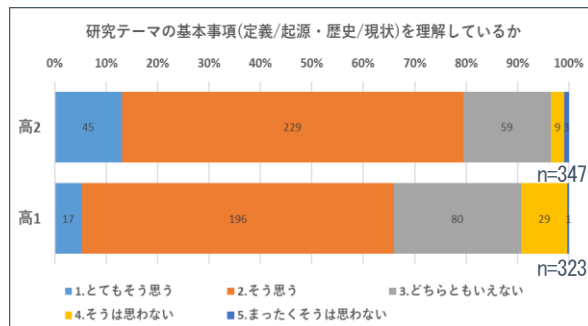
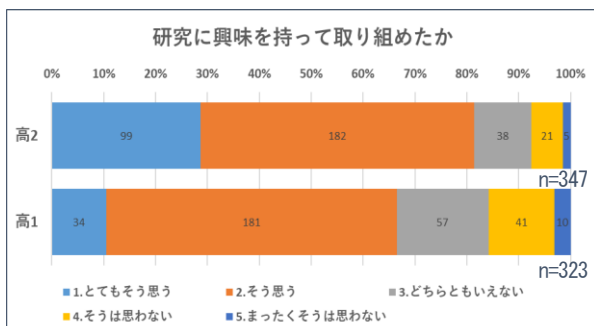


<4. 検証結果>

上記のカリキュラム改定と授業改善を実施。一年間の課程を終えました。その結果を検証する方法として、カリキュラム改訂・授業改善施策を実施した高2生と、カリキュラムを改訂しなかった高1生、それぞれの各種データ(授業評価アンケート、利用統計、参考文献図書冊数など)を比較しました。

結果1:

[仮説1]生徒主体のテーマ設定であるほど、探究学習に対する学習意欲が向上し、生徒は図書館を活用するのではないかと

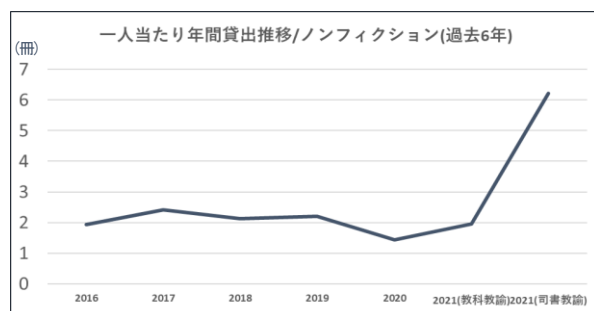
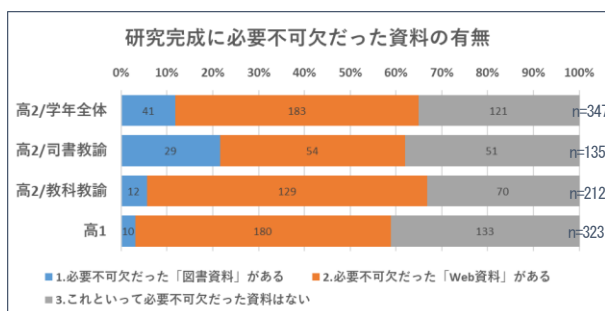
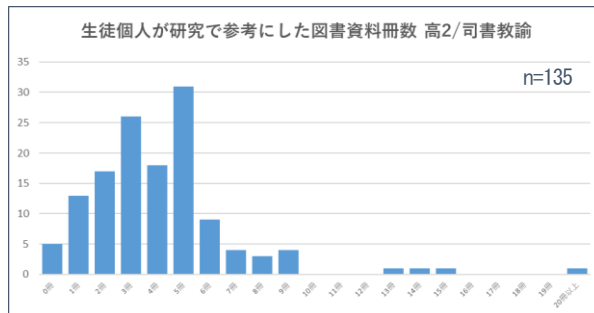
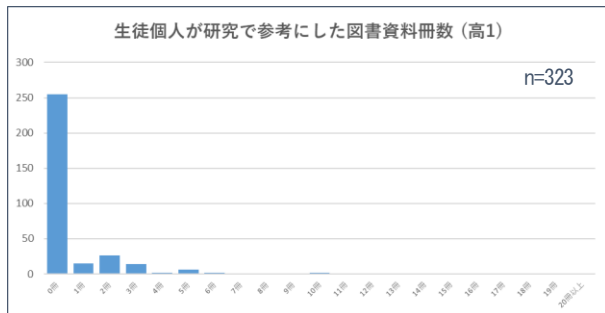


検証結果:生徒主体のテーマ設定で研究を行う高校2年生の方が、教員主体のテーマ設定で研究を行う高校1年生よりも、「研究に興味を持って取り組むことができたか」「研究テーマに関する知識の理解」などのアンケート設問で、よりポジティブな結果となり、学習意欲の向上が示された。



結果 2:

[仮説 2](仮説 1)に基づき授業を設計し、さらに図書館スタッフから図書探索の支援を受ければ、図書館の利用統計データにも変化が現れるのではないか



検証結果:生徒主体のテーマ設定で研究を行った高2生の方が、教員主体のテーマ設定で研究を行った高1生よりも、図書館を活用して学んでいた。とりわけ、図書館スタッフ(司書教諭)が授業を担当したクラスでは、70%以上の生徒が3冊以上の図書資料を参考にし、さらに20%近くが「自分の研究に必需不可欠な図書資料があった」と回答した。また、高2学年全体の一人当たり年間貸出冊数(ノンフィクションのみ)が、過去のデータと比べて約5倍に向上した。



【考察】

以上の結果から、カリキュラムを改訂し、生徒主体のテーマ設定で学んだ高校2年生の方が、教員主体のテーマ設定で研究を行った高校1年生よりも、学習意欲が高い傾向にあることがわかりました。「自分が興味を持つ事をテーマに選ぶ」という授業設計が、生徒が本来持っている主体性とマッチし、よい結果に繋がったと考えられます。

また、学習意欲の向上は図書館の利用統計にも顕著に表れています。手元の端末でお手軽にWeb検索するのではなく、専門家が書いた図書に生徒が自ら手を伸ばし、複数の文献を読みながら自ら研究を進めていたこともまた、学習意欲の表れと捉えることが出来るでしょう。

さらに、生徒の研究活動を下支えする存在として、図書館スタッフ(司書・司書教諭)が関わっていたことも、良い結果に繋がった要因でした。同じ高2生のデータでも、司書教諭が授業を担当したか否かで図書館活用に差が出ており、「図書館は頼れる」という生徒からの信頼感の表れと考えられます。

今回のプレスリリースでは報告を省きますが、カリキュラムを改訂した高2生の学習データは、中3生で実施している卒業論文「なんでやねん」のデータとも比較しました。結果、高2生よりも中3生の方がさらに顕著に、意欲的に学び、図書館も活用していたことがわかっています。「生徒主体のテーマ設定」「グループではなく個人で研究する」「ポスター発表だけでなく、論文を書く」「図書館スタッフが常に資料支援を行う」といった特徴を持つ中3の授業設計が、探究学習における学習意欲向上、図書館活用という点において、何らかの強い影響を示唆する結果となりました。

【生徒からのコメント】

「たくさん本が置いてある図書館で自分が参考にしたい本を見つけることは大変だけど、司書の先生に言ったら『その本はこの分野にある』と教えてくれた。また、借りたい本の名前を言わなくても『こんな感じの本が欲しい』と言ったら、何冊も見つけてくれた。『どんな本を借りればいいのか悩んでいる』と言ったら、いろいろな種類の観点から書いた本を紹介してくれたので、とても頼ることができた」

「自分が欲しいと思っているような本について、『どんな内容のものが欲しいのか』やキーワードをちょっと伝えるだけで、次の授業までに準備をしてくださったので、とても助かった。今までは小説しか借りたことがなくて、研究で使ったようなノンフィクションがこんなにたくさんあったなんて知らなかったので、たくさん本から必要な本を選ぶのが大変だったけど、たくさん本があった分、自分にも読み易い本が見つかった」

「こちらが頼んでいない時にも、司書の先生が私の研究テーマを分かってくれていて、授業中に本を勧めて下さった。その本が研究にすごく役立った。先生が『これとか研究テーマにあいそう』とたくさん本を持ってきてくれた。特に相談とかはしていなかったのに、知りたいことドンピシャで当てはまる文献をたくさん持ってきてくれて助かった。それに加えて、先生自身の知見を加えてくれてとてもわかりやすかった。」

「Webと図書、2つの手段にはとてもおもしろい違いがあった。Webは、上手く検索すれば自分の知りたいことを最短で知れる。しかし、逆に言えばそれ以上も以下もないので、あまりテーマが広がらなかった。それに対して図書では、自分が知りたいことの他にも、付随する関連知識がたくさん述べられていて、『へえ、そーなんや』と思うことがいくつもあって、とても深く理解ができ、テーマも広がった。これこそが、今回の自分が研究した「不利益」に相当するものだと思って、とても実りのある研究となった」

「本を探している時に、図書館の先生に聞くとすぐに教えてくれた。自分たちが探している本だけでなく、研究に関連するおすすめの本も紹介してくれた。関連の本はテーマ決めにも役立った。下調べの段階でその分野の本をある程度広い範囲で提示して下さったので、具体的な研究の方向を決める際に助かった。一見、自分たちのテーマと関係がないように見える本も、大事なことが書いてあったりして、多くの図書資料を参考にすることは研究をより深いものにするには不可欠だった」



【先生からのコメント】

探究学習における図書館活用について、授業者が現場レベルで実感していた課題と、その解決策が、今回の研究事業によってある程度具体的に見えてきました。本で学ぶという行為には、読解力や、難しい事を理解しようとする根気といった、ある種の知的体力が必要です。そのような学びを支えるモチベーションとして、「生徒自身が興味・関心を持ってテーマを選ぶこと」は探究学習の前提であるべきです。この前提が崩れたカリキュラムである以上、多くの生徒から「本は面倒だから読まない」「ネット記事の方が楽に仕上げられる」という感想が漏れるのは仕方のない事だと思います。

授業における図書館活用は、ただ必要な情報を集め、「正解」を探すために利用すれば良いというわけではありません。そういった利用だけが推進されるのでは、いずれ図書館はインターネットの利便性にとって代わられるでしょう。そうならないためには、探究学習とは何かという根本から議論することが必要です。先生から与えられたテーマ(課題)に対して、その答えや解決策を考えることが探究なのか。もしくは、自らの興味・関心を深めていく中で、自分だけのオリジナルテーマに行きつくのか。多様な蔵書で構成される図書館は、後者のような探究学習でこそ活かされる場です。生徒個々人の多様な興味・関心に対して、専門家が生涯かけて著した図書資料を提供できる場だからです。

また、図書というハードを整備するだけではなく、司書・司書教諭というソフトも非常に重要です。これも日々実感することですが、自分に合う本を図書館で見つけるためには、ある程度の訓練が求められます。図書館を使い慣れる事はもちろん、昨今の生徒をみていると、「本棚から本を手にとってみる」「目次・はじめに・帯・見返し等を見て、読むかどうかを判断する」という、「所作」から指導するのを感じます。そのような生徒を目の前にして、どういう本を、どのように手渡すべきか。ここに、学校図書館で働くスタッフの専門性が求められると思います。

「君はどんなテーマで探究がしたいのだろうか」と、テーマ設定段階から生徒と関わること。そこから複数の資料を提供して、生徒の探究の可能性を上げてあげること。このような、生徒の潜在的な知的好奇心に問いかけるレファレンス(資料調査業務)こそが、探究学習における図書館の役割です。司書・司書教諭による「問いかけ」「資料提供」という関わりによって、生徒は図書館という場所を信頼します。その信頼感が、しぜんと貸出冊数といったデータにも繋がるのだと思います。(研究事業担当 司書教諭 / 山崎勇氣)

【校長からのメッセージ】

本校の図書館「リブラリア」は、生徒たち一人ひとりが自分自身の賜物に気づき 100%の人生を生きるために必要な学びを存分に楽しめる空間です。生徒たちが集い活用する生きた図書館として、2014年には学校図書館大賞(全国 1 位)の評価もいただきました。本校では、この「リブラリア」を活用した総合学習や Global Studies などによって、生徒たち自身が知的好奇心や課題解決のための行動力を高め、教師主導ではなく自発的に新たな取り組みを始めてくれるケースがますます増えています。たいへん嬉しいことであります。BYOD 方式による生徒端末の運用など先進的な ICT 活用とのコラボレーションも充実しており、「リブラリア」での教育活動にはこれからも大きな期待が寄せられています。「答えのない時代」とされる社会状況の中で豊かな創造性をもって生き生きと歩んでいく生徒たちを育成する——その重要な務めに資する質の高い図書館教育を今後も提供して行きたいと思っております。

※1 第 66 回学校読書調査

<https://www.j-sla.or.jp/material/research/dokusyotyousa.html>